

11. 今川の嫁謗(よめそしり)堤

大阪から平野の大念仏寺に参詣する老婆たちが、この堤まで来ると、付近に人がいないために、かねてからの嫁の不平や不満を安心して語り合ったことから、この名前ができたといわれる。

この場所は桑津から東に向かう道筋に当たり、西から駒川、狭山西除天道川、狭山西除今川の3つの川が僅か250~270mの間を北上し、その堤が都合で6本近く存在したようです。

大坂冬の陣には敗残兵が隠れたり(「這いあがり堤」参照)して、老婆が愚痴を言う場所としては、人目に触れない場所であったと考えられます。江戸中期の宝永2年(1705年)に大和川が開削されて、天道川が干拓され姿を消したものの、「駒川と今川の間は残っていた*」ので、嫁謗には、旧天道川の川跡が最も相応しい場所であったと考えられるが、現在では今川の東堤のみが残されているので、嫁謗堤と言えば、今川と解されるようになったと思われます。



※狭山西除天道川(西除川)の堤

大和川付替後に不要となった旧天道川の川堤は長らく残っていました。例えば、昭和の中頃までは、湯里住吉神社の西側から、南百済小学校の西側には左岸堤の一部が残っており、その上を自転車で走ってスリルを楽しんだ記憶のある古老がおられます。

12. 今川の這い上がり堤 (桜とユキヤナギ)

◎ 這い上がり堤

嫁傍堤(ヨメソシリツツミ) (No. 11) とほぼ同じ場所(桑津小学校東側から240mの間)と思われますが、夏の陣の際には駒川・天道川・今川の三河川が接近し北上していたので、この辺りの川堤は三重の堀(6本の堤)を形成し、平野で負傷した兵士が逃げ込むのに格好な場所であったと考えられます。傷ついた兵士たちが、平野から逃げてきて、「一番高かった今川の堤をやっとの思いで這い上がった」ことから名付けられたと言われていました。現在の水門から南へ500mほど上流の辺りをこの名前と呼んでいたとされます。ここには明治初年頃まで名物の「しんこ餅(※)」を売る二軒茶屋がありました。

※「しんこ餅」・・・饅頭ではなく豆餡餅のこと。

桜とユキヤナギ

3月末頃から4月にかけて、今川沿いは桜とユキヤナギが咲き乱れ、ピンクと白のコントラストがとてもきれいです。特に北育和橋から北220mや川原橋(南港通)から北250mの眺めは絶景です。



13. うるし堤

漆（うるし）は縄文時代から利用されていましたが、割安で修復可能な実用品の器であったものが、室町時代には高級美術品の水準に達し、宣教師により海外に紹介されて、日本の重要な輸出品となりました。

江戸時代になって、全国的に栽培が奨励されて、日本人に紅葉で馴染みの漆林が、各地に造成されました。

大坂では正徳5年(1715年)付けの城連寺村庄屋が堤奉行に宛てた文書の中に「堤上櫨樹多く・・・」が見えるので、この頃には既に「今川のうるし堤」が存在していたことが分かります。

大坂町奉行(大坂城代)土井大炊頭利位(トシツラ)※{天保5~8年(1834年-1837年)}が漆産業育成と堤の補強をかねて、今川(No. 6)や駒川(No. 37)、西除川の堤に漆を植えたものが、戦争中まで残っていたとの説もあります。

日本の漆はその主成分(ウルシオール)が70%もあるに対して、中国産は60%前後、ベトナム産は34%位であり、漆=japan と呼ばれる由縁であります。特に戦前までは現在の川原橋(南港通交差点)から杭全水門までの右岸堤は漆並木があり、秋には美しい紅葉を見せていたので、「うるし堤」の名称が区内一円に広がり、名所となっていました。

しかし、漆木が分泌する樹液に触れると、漆にかぶれ、赤く腫れ上がる弊害があり、漆に近づくのを恐れたものです。

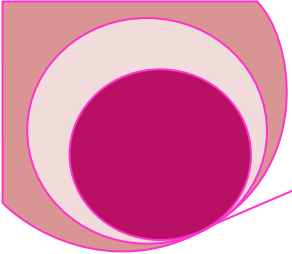
戦争中の燃料不足時に近隣の住人がこれを盗伐し、燃やした時に噴出する樹液の蒸気が体にかかって、ひどい目に遭った話を聞きますが、これが最後に今川漆は我々の生活環境から消え去りました。

今川や旧狭山西除天道川の沿道に現存する漆は今六橋の北70メートル付近の河川敷に植えられた20本の漆以外、全て無刺激性の櫨(ハゼ)のようです。この漆は絶滅した往年のうるし堤の景観を偲び、少しでも復元しようと、戦前に今川沿岸の自宅に飛んできて大きくなった漆の木の実を、その家の人々が昭和30年(1955年)代に蒔いたもので、今川漆の孫になります。今川沿岸整備のために、誤ってこの木も伐採されましたが、現在その薬(ヒコバエ)が延びてきて、美しい紅葉を見せ始めています。

西除川沿岸では松原市布忍神社、東住吉区矢田の阿麻美許曾神社(No. 3)、駒川沿岸では鷹合神社(No. 48)の川沿境内で、漆が残っていたとのことであるので、広く川堤に植えられていたようですが、最近では皮膚に炎症を起こす苦情からか、ことごとく伐採されています。

(次ページにつづく)





東住吉 100 物語

※土井大炊頭利位

幕末の大阪奉行であったが、漆事業の振興については、家康・秀忠・家光に仕えた土井大炊頭利勝(天正3年～寛永21年(1575年～1644年))が2代将軍・秀忠の時代に、全国的に漆事業を奨励した事績があるので、利勝と今川漆を結びつける説もあります。

正徳5年(1715年)付けの城連寺村庄屋に残る文書からみると、この説の方に辻褃が合いますが、どちらが正しいか不明確です。

14. うるし堤公園

大坂町奉行・土井大炊頭利位が漆産業の育成と堤の補強を兼ねて、今川や西除川の堤に漆を植えたのが、戦中まで残っており、この名前があるが、戦時中の燃料難に盗伐されて絶滅しました。

現在は櫻の名所で春には夜桜見物のぼんぼりと柁席が奪い合いになる賑わいを見せています。

この堤から東は土地が低く、電柱なども無く、稲を刈り取った田んぼが平野まで続いていました。又、西の方は、家屋が少なく西風が吹きぬけて、凧揚げには最適の場所でした。東のほうに住宅が建ち始める昭和40年(1965年)頃までは、お正月には、たくさんの、子供や大人が並んで、凧が小さく見えるほど、遠く、高くあげて、楽しんだものでした。昭和36年~昭和38年(1961年~1963年)ごろまでは、食用蛙がたくさん棲み、梅雨の頃には、「ぐうわ、ぐうわ、ぐうわ」と鳴き声に話し声がかき消されるくらいでした。トンボも、やんま、しおから、など子供たちは、トンボつりに歓声が、上がっていました。夕暮れには、白鷺が雁行して、堺の仁徳陵(南南西)の方に向かって帰ってゆくのが見られました。

今では、春には、鶯が来て、その声が心を和ませてくれます。夏には、蝉の声に悩まされ、飛び交う蝉が、時には顔にぶつかるくらい多く、子どもが蝉獲りに、はしゃぐ風景が見られます。

うるし堤(復元地)

第二次世界大戦前、今川の堤には、一抱えもある見事な漆の並木がありました。が、戦時中の燃料難から、徐々に盗伐され、遂には根まで掘り起こされ、全く姿を止めぬまでになりました。(今六橋の欄干(木製)まで、盗難に遭い、欄干のない橋になるという、ひどい時代でした・・・)

今六橋から北の今川西側河川敷に、約20本の漆が植えられています。秋になると紅葉した「うるし堤」の昔を偲ばせる風情が残されています。

既に50年以上経ち、年数の割には大きくなっていませんが、毎年11月頃、ひとたび寒気が訪れると、漆特有の紅葉のグラデーションが楽しめます。

(詳しくは No.13 うるし堤 を参照)



15. 映画館物語

昭和30年～昭和40年（1955年～1965年）代は《戦後映画の黄金期》とよばれ、全国のどこの街にもたくさんの映画館がありました。

一つ屋根の下、スクリーンに繰り広げられる音と映像によって、喜び、悲しみ、怒り、そして楽しさを共有することができる庶民の娯楽の場所であり、文化の発信基地でもありました。

館内で拍手や喝采をおくったものです。文字通りスターが輝いていた時代であり、スターは人々の憧れの対象そのものでした。チャンバラ映画のヒーローに胸をときめかせて、あちこちの路地裏や空き地で、夢中になってチャンバラごっこする子どもの姿も見られました。

ピーク時、昭和33年（1958年）には、東住吉区だけでも9館の映画館があり、料金は三本立てで55円という所もありました。針中野駅前の針中野センター劇場に「サーカス」がやって来たこともあります。

また、映画館ではありませんが「光劇場」という小劇場が西今川町1丁目にあり、有名な浪花節や大衆演劇がよく上演されていたということです。

いくつもの映画館が時代とともに消え、最後に残っていた「田辺キネマ」も惜しまれつつ平成24年（2012年）3月31日に閉館し、時代の移ろいに寂しさを感じます。

「全国映画館名簿」該当部の抜粋コピー昭和33年（1958年）4月現在

- 1、田辺キネマ 駒川町6丁目
- 2、桑津敷島劇場 桑津町2丁目
- 3、田辺松竹 田辺本町4丁目
- 4、田辺大映 田辺本町5丁目
- 5、バンビ劇場 田辺本町5丁目
- 6、北田辺映劇 田辺東之町2丁目
- 7、針中野東映 鷹合町1丁目
- 8、針中野センター劇場 駒川町8丁目
- 9、矢田映画劇場 矢田富田町



| 館名 | 所在地 | 電話 | 系統 | 映機 | 発声機 | 音響設備 |
|-------------|----------|------|----|----|-----|------|
| 1 田辺キネマ | 駒川町7丁目 | 0878 | 東大 | 16 | 16 | 16 |
| 2 桑津敷島劇場 | 桑津町2丁目 | 0576 | 東大 | 16 | 16 | 16 |
| 3 田辺松竹 | 田辺本町4丁目 | 0345 | 東大 | 16 | 16 | 16 |
| 4 田辺大映 | 田辺本町5丁目 | 0345 | 東大 | 16 | 16 | 16 |
| 5 バンビ劇場 | 田辺本町5丁目 | 0345 | 東大 | 16 | 16 | 16 |
| 6 北田辺映劇 | 田辺東之町2丁目 | 0345 | 東大 | 16 | 16 | 16 |
| 7 針中野東映 | 鷹合町1丁目 | 0345 | 東大 | 16 | 16 | 16 |
| 8 針中野センター劇場 | 駒川町8丁目 | 0345 | 東大 | 16 | 16 | 16 |
| 9 矢田映画劇場 | 矢田富田町 | 0345 | 東大 | 16 | 16 | 16 |

16. 榎神社

現在地に樹齢 800 有余年を数える榎の大木があり、土地の人々がこの木をご神体として社殿をつくり、年々参詣者も増加したので、昭和 27 年（1952 年）4 月に宗教法人となり、翌昭和 28 年（1953 年）に拝殿と社務所を新設した極めて新しい由緒の神社です。しかし、境内の桑津墓地（No. 35）は行基 菩薩に由来する伝承があります。（行基由来の伝承については、事実が検証できておらず、異なる伝承もあります。）

現在の住居表示：北田辺 1-8 に変更される前には、大塚町と呼ばれており、境内の小高い場所には古墳があったことに由来するものではないかと言われています。

榎の名所としても、地元の人たちに親しまれています。



17. 圓明寺(えんみょうじ)

大阪の台所として有名な「黒門市場」が、明治時代に「圓明寺市場」と呼ばれていたことは、意外に知られていません。

江戸時代の文政年間、黒塗りの山門を構えた圓明寺が市場の西側にあり、その山門の前で魚商人らが市を出したのが起源といわれています。

しかし、明治45年(1912年)の難波大火で寺院・山門ともに焼失しました。その後、「圓明寺の黒い門」が市場の名前として引き継がれ、「黒門市場」と呼ばれるようになり、戦後「大阪の胃袋」として賑わい始め、年末には1日約15万人以上が買い物に訪れます。

一方、「圓明寺」は照ヶ丘矢田に移転し、現在に至っています。

この場所は西除天道川の川跡で、天道川(天井川)が磯齒津(しはつ)路(No.42)、(長居公園通)と交差する南側にありますので、旧西除川をたどってみようとする人たちの、目印にもなります。



黒門町にあった圓明寺

18. 息長川(おきなががわ)

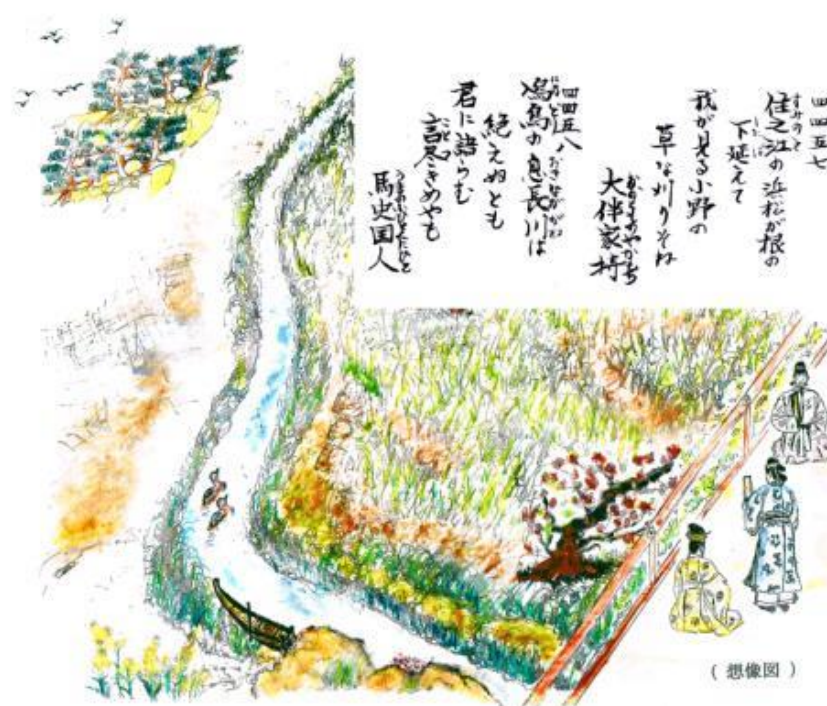
河内国伎人郷(クレサト・現平野区喜連)の豪族、馬史国人(ウマノフヒトクニヒト)が万葉集の巻20-4458番に詠んだ、「鴉鳥(ニホドリ)の息長川(オキナガガワ)は絶えぬとも君に語らむ言(コト)尽きめやも」に見える息長川は、通説では近江の天野川とされていますが、河内の川という説もあり、私たちは現在の今川がその流れを汲むものだと考えています。

そして「この歌は古今和歌六帖に僅か一文字違いで、『君に語らふ言尽きめやも』(読み人知らず)と詠まれている、古歌の引用である」とする通説に対して、私たちは国人の歌が本元で、これが詠まれた奈良時代中期(756年)より、150年も後に編纂された、「古今和歌六帖」に載っている歌の方が、万葉集の歌を引用したものであると考えています。

つまり、巻20-4458番に詠まれた「息長川」は、奈良時代末期から平安初期に至る度重なる大洪水で、息長川の水源となる馬池谷筋が埋まってしまったため、この歌が「古今和歌六帖」に詠まれた頃には、豊かな水量を維持していた「息長川」が姿を消し、何処の川か分からなくなったからだと考えています。[大阪春秋(平成20年(2008年)秋号、平成10年(1998年)10月、100~108頁)を引用]

また、源氏物語の夕顔の巻では、初めての道行きに、光源氏が夕顔に対して、何の説明もなく突然に「息長川と契り給ふよりほかのことなし」として、「末永い愛を誓って『息長川』を繰り返した」と「息長川」を引用しています。

文学界の通説ではこの台詞は、古歌を書き写した屏風絵や歌扇に書かれ、また鴉鳥の歌も歌人に広く詠まれていたため、「息長川」と言えば「誠実な恋」を意味するものと考えられていたようです。しかし国人の歌意は恋ではなく、客人・大伴家持の挨拶歌に対する答礼歌であった(鴻巣盛廣説)と考えられ、両方の歌は僅か一字違いで、全く異なった意味の歌であると考えています。



(想像図)

19. 奥村橋石碑

杭全のロータリー（杭全交差点 No. 28）から国道 25 号線（通称奈良街道 No. 36）を西へ行き、まもなく JR 大和路線の高架下をくぐり、更に 20m ほどいったところに橋があります。

駒川に架かる橋で、国道が広いので、橋とは思わず通り過ぎてしまいますが、桑津 1 丁目 31 番と 33 番のあいだに架かっています。

この橋が、昔の、四天王寺や舍利寺へ行く道をさえぎる今川・駒川を渡る、ちょっとした要衝でした。何回か架け替えられた今の橋の四方の袂の銅板に、「奥村橋」「おくむらばし」の銘が入れられています。

「奥村本家林右衛門、隠居して道清、88 歳米寿（ますかけ）の内祝いに、私財をもって石橋（渡り三間半、幅 2 間半、厚さ八寸八枚掛、中柱のもの）を寄付。お上は、「奇特なこと」として特に橋名に奥村と入れることを允許（いんきょ）。嘉永 6 年（1853 年）11 月 3 日わたり初め式があり、正念寺正寿が法事、隠居道清が嗣子（しし）林右衛門と袴帯刀姿で渡り村人と紅白の餅一石五斗を撒いた」と古記録にあります。

- ・ 架橋年…嘉永 6 年（1853 年）11 月
- ・ 標柱…現在の標柱は、初代の脇石を用いたので、その断面は膨らみのある不等辺四角形（もと、東詰南側に立っていたが、昭和 32 年（1957 年）6 月国道の改修の為、現在の西側南詰めへ。昭和 36 年（1961 年）1 月鉄枠にて補修。昭和 61 年（1986 年）九月国道大改修に際して少し掘りあげて再度補修し、昭和 62 年（1987 年）6 月現状のようになる。）
- ・ 標記…正（西）面 奥村橋
- ・ 裏（東）面 嘉永六年癸丑十一月吉辰
- ・ 左側（北）面 平野郷今在家村
- ・ 八十八翁奥邑道清架之（その下に埋もれて）、林右衛門 管之
- ・ 揮毫者・・・奥村富三郎
（奥村林蔵氏記録より抜粋）

